

【一般選抜試験（前期） 2024年2月1日（木）実施】

設問：次の文を読んで後の問題に答えなさい。

（前略）

失敗したときの反応は、多くの場合、段階的に表れます。その反応は人によってそれほど変わりません。

神経が極端に凶太かったり、よほど感度が鈍い人を除けば、人は失敗したときにまず「しまった」と感じます。そして、がっかりしたり、その状況が嫌で嫌でたまらなくなります。あるいは何も考えることができない茫然自失の状態になります。

これが失敗直後に起こる第一段階の反応です。

なぜほとんどの人は、失敗直後に「しまった」と感じるのでしょうか。それは起こっている失敗を前にして、当然こんなことが起こることを数のうちに入れておかなくては いけなかったのに、と感じるからです。こうした事態になるということを考えて行動していればよかったのに、自分は何もしなかったからこんなことが起こってしまったということを瞬間的に感じるのです。

よく失敗が起こってから、「まさかこんなことが起こるとは思わなかった」と言う人がいます。つまりその人にとって「想定外」のことが起こったということですが、この「想定外」も大きくふたつに分けられます。起こってしまった現象が、まったくの想定外であるということがそのひとつです。しかし多くのケースでは、一応は想定していたものの、そんなことが実際に起こるということを計算に入れていなかったのです。

つまり、知識として知っていたり、頭の中では「そうしたことが起こるかもしれない」と考えているのに、それでも失敗してしまうのです。この原因は一言で言うと、「油断」です。

この種の失敗をする人は、「失敗など滅多に起こることがない」「たぶん大丈夫だろう」と、根拠もなく考えています。面倒くさがりでもあります。だから本当は重視しなければならぬ大切なことをつい軽く扱ったり、何が大事であるかのウエイト付けを行わなかったりします。その結果、やらずもがなの失敗をして、自分の思慮のなさを後悔することになります。これはまったくムダな失敗の典型ですが、こうした人はなぜ失敗が起こったのか、その原因を本当は知っています。だから、そこで起こったことにきちんと向き合うことができれば、次から同じ失敗を繰り返すことはありません。

しかし、そうは言っても、実際に失敗直後に自分が起こした失敗の原因をすべてきちんと理解できる人はなかなかいません。なかには、そこで何が起こっているかさえ把握していない人もいます。

なぜなら知識として知っていても、現実にかかる問題として考えていないから、実際

に目の前で起こっていることと、自分の知っていることを結びつけて考えることができないのです。これでは知らないのと同じことです。もっとひどいケースでは、自分が失敗したことにすら、いつまで経っても気づかないような人もいます。

(後略)

出典：畑村洋太郎著「回復力 失敗からの復活」
講談社現代新書 2023年 54頁～56頁

問題：著者の主張に対するあなたの考えを、身近な例をあげて 800 字以内で記述しなさい。

以 上